

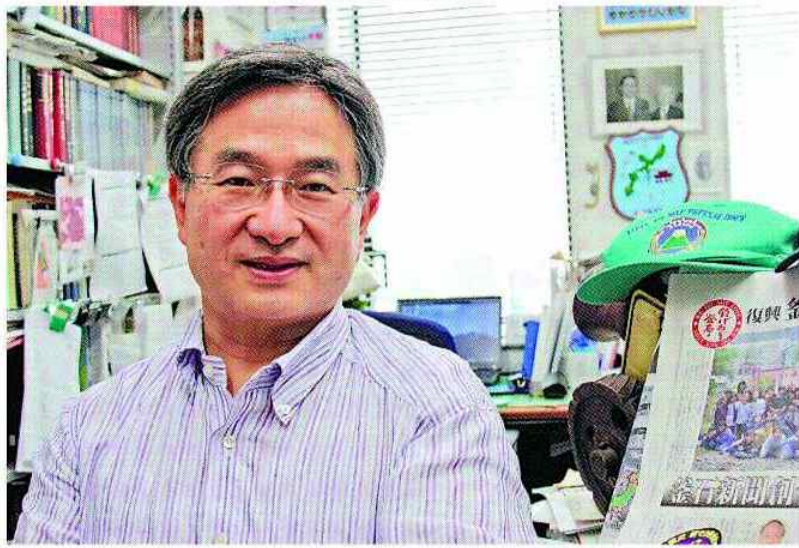
ガダルカナルから70年 最前線・旭川

軍都という歴史を背負い、旭川は保守的だと指摘される。「戦前の旭川は軍とコメのまち。戦後、軍は自衛隊となり、さらに公共事業の要素が加わった。新しいものを生み出すというよりも、限られたものを分け合う、今あるものを守る、そういう考えが根底にある」。地元・旭川大学学長の山内亮史さん(70)の分析だ。

■まちの気質

五十嵐広三市政が誕生したのは1963年。各地で革新自治体が誕生した時代で、山内さんは五十嵐元市長の若手

水島朝穂さん



旧ソ連が北海道の北半分を占領していたら、旭川はその中心都市になっていた可能性が高かった

■「無念」宿る

保阪さんはかつて、アメリカ軍がガダルカナルで撮影した写真を見たことがある。若い兵士たちが砂浜に眠るように死んでいた。「不条理を押し付けられるのは、いつも末端の兵士たち。私には、彼らの無念の思いが旭川に宿っていると思えてならない」

■評価に危惧

保阪さんは「66年間の歳月は戦争を乗り越えるのに必要な時間だった」とする一方、東日本大震災の元兵士たちからも聞かされた。保阪さんは「66年間の歳月は戦争を乗り越えるのに必要な時間だった」とする一方、東日本大震災の元兵士たちからも聞かされた。



保阪正康さん

⑤ ふるさと

昭和の教訓生かす努力を

き取りを続けてきた。旧陸軍第7師団を題材とした「最強師団の宿命」(毎日新聞社、2008年)という著書を執筆した「ガダルカナルに限らず、大本営作戦部の作戦があまりにも都合よく利用された節がある。この



山内亮史さん

この連載は旭川報道部の立野理彦が担当しました